



四万十町  
町内「ぶら〜り」散策

# 向川

むかいがわ

**東** 又・本堂の交差点を東又川に沿って仁井田方面に行く。間もなく高知道をくぐるという辺りで東又川は西に向かつてぐるっと回り込むのであるが、この回り込みが描く半円の頂点で仁井田川と合流するというより、半円に向かつて仁井田川が突き当たるように流れ込む。この合流地点の南側に向川地区がある。東又川と、東又川が合流した後の仁井田川に囲まれる半島状の地区である。

東又地区の最も北西にあたる向川は、歴史的には仁井田地区との交流が深い。わん曲する川を挟んだ西側が仁井田地区中ノ越。北東側が小向となる。

天正17年(1589)に記されたある地帳には「向川之村」とあるが、江戸時代中期に編纂された地誌(地形・気候・人口・交通・産業・歴史・文化などを調査した書物)「土佐州郡志」では、中ノ越村内の小村「向口」という記載になっており、この「向口」が向川のことであろうと推察されている。いづれにしても、向川は、中ノ越とほぼ一体の村として長い歴史を歩んできたようである。その名残であろうか、現在も向川の住民が中ノ越にある田を所有していたり、またその逆であったりと、行き来は盛んである。

この盛んな行き来を支えているのが仁井田川にかかる富岡橋。この橋の



富岡橋の下にある堰

真下に堰が設けられている。堰と言っても景観を台無しにするような現代的なものではない。この堰はもともと東川角周辺の農業用水確保のため江戸時代初期に土佐藩家老・野中兼山指揮のもとで作られたものである。(「東川角の巻参照」) それ以降改修を繰り返して今日に至っている。堰を含めた田園風景はともて趣がある。

さて、向川というところは中ノ越と並んで、歴史的に有畜複合型の農業が盛んに行われていたようである。江戸中期・寛保年間(徳川吉宗の頃)の記録を見ると他の地区と比べて牛馬の保有率が非常に高いのがわかる。これは、この地区が牛馬による堆肥投入という土づくりが長年行われてきたことを意味する。東又川と仁井田川の度重なる氾濫にも見舞われたであろうことを併せて考えれば、向川に広がる田畑の肥沃さは「推して知るべし」である。この肥沃な地区には、現在20世帯・40人余りの方が暮らしている。

| 町のうごき | (7月31日) |       |          |      | 出生 死亡 転入 転出 |    |    |    |
|-------|---------|-------|----------|------|-------------|----|----|----|
|       | 人口      | 前月比   | 男        | 女    | 男           | 女  | 男  | 女  |
|       | 男       | 8,477 | -13      | 3    | 16          | 16 | 16 | 16 |
| 女     | 9,460   | -3    | 5        | 14   | 20          | 12 | 12 |    |
| 計     | 17,937  | -16   | 8        | 30   | 36          | 28 | 28 |    |
| 世帯数   | 8,656   | 4     | (7月中の届出) |      |             |    |    |    |
| 窪川地域  | 12,574人 | 大正地域  | 2,576人   | 十和地域 | 2,787人      |    |    |    |

  

| 四万十川の<br>水質状況 | 適正值(mg/l) |        | 8月8日   |  |
|---------------|-----------|--------|--------|--|
|               | リン酸       | ≤ 1.0  | 測定範囲以下 |  |
|               | 硝酸        | ≤ 0.5  | 測定範囲以下 |  |
|               | アンモニウム    | ≤ 5.0  | 測定範囲以下 |  |
|               | アニオン活性剤   | ≤ 1.0  | 0.05   |  |
|               | 化学的酸素要求量  | ≤ 10.0 | 3.683  |  |

調査：大正(吾川)  
資料：四万十高校自然環境部